

## 研究資料

## 三十六歌仙基礎資料稿(3)

—— 影月堂文庫所蔵「古名筆三十六歌仙帖」の翻刻と解題 ——

吉 海 直 人

同志社女子大学・表象文化学部・日本語日本文学科・特別任用教授

A Bibliographical Introduction  
to the “Ko-Meihitsu-Sanjyurokukasen-Jyo”

YOSHIKAI Naoto

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Culture and Representation,  
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Special appointment professor

## 【要旨】

本稿では、「三十六歌仙基礎資料稿」(2)の続編として、影月堂文庫所蔵の色替り料紙「古名筆三十六歌仙帖」を翻刻し、その簡単な書誌と解題を付した。今回の写本の特徴は、歌の配列が大きく異なっていることである。

## 【キーワード】

三十六歌仙・写本・色替り料紙・配列

## 【翻刻】

色替り料紙「古名筆三十六歌仙帖」

## 藤原興風

1 契りけんころぞつらき七夕のとしにひとたび逢はあふかわ (公・俊)

〔現代語訳〕一年に一度逢おうと約束した織姫の心はつれないなあ。一年に一度の逢瀬など逢ううちに入らないよ。

## 藤原清正

2 天津風吹飯野宇良仁居田鶴能南土賀雲井尔可遍羅佐流倍喜 (公・俊) / (二丁裏)

〔天つ風吹飯の浦にいる田鶴のなか雲居に帰らざるべき〕

〔現代語訳〕天つ風が吹くという名を持つ吹飯の浦にいる鶴が、どうして雲の上に帰らないことがありますか(私もいつか昇殿を許されて宮中に帰ります)。

## 坂上是則

3 三芳野ゝ山のしらゆきつもるらしふるさとさむく成まさる也 (公・俊)

〔現代語訳〕吉野山の白雪は降り積もっていることだろう。旧都奈良がこんなに寒くなったのだから。

大中臣能宣朝臣

4 千とせまでちぎれる松も今年より君にひかれて萬代や経ん（公）／（二丁表）

〔現代語訳〕 千年までと寿命が定められている松も、今年からはあなたの長寿にあやかっつて、万年も生き続けることができるだろう。

三条院女藏人左近

5 岩橋のよるの契りも絶ぬべしあくるわびしきかつらぎの神（公・俊）

〔現代語訳〕 久米路の岩橋の工事が中断したように、あなたとの仲も途絶えそうです。葛城の神のように醜い私の顔を見ようと、夜明けまで帰らないおつもりなら（顔を見られるのは恥ずかしい）。

平兼盛

6 暮て行あきの形見におく物はわがもとゆひの霜にぞ有ける（公・俊）／（二丁裏）

〔現代語訳〕 暮れて去ってゆく秋が形見に残していたものは、私の元結に置いた霜ならぬ白髪（老の象徴）であったなあ。

中納言兼輔

7 人の親の心はやみにあらねども子を思ふみちにまよひぬる哉（公）

〔現代語訳〕 親の心は決して闇などではないのに、子供のこととなると分別をなくして、闇路を迷っているばかりです。

源公忠朝臣

8 行やらで山路暮しつほとゝぎす今一聲のきかまほしさに（公・俊）／（三丁表）

〔現代語訳〕 山道を行きすぎることができず日を暮らしてしまいました。山道で聞いたほととぎすの鳴き声をもう一度聞きたいばかりに。

権中納言敦忠

9 逢見ての後の心にくらぶればむかしは物をおもはざりけり（公）

〔現代語訳〕 あなたと契りを結んだ今の恋しさに比べると、逢う以前の物思いなど無きに等しいものでした。

斎宮女御

10 ことのねに峯の松風かよふらしいづれのをよりしらべ初けん（公）／（三丁裏）

〔現代語訳〕 琴の音に峰の松風が通い合っているようです。これは琴のどの緒と

峰のどの尾から奏で始められたのでしょうか。

源宗千朝臣

11 常盤なるまつのみどりも春くればいましほの色増りけり（公・俊）

〔現代語訳〕 常緑の松の緑も春が来ると、もう一回染め汁に浸したように緑の色が濃くなることだ。

藤原敏行朝臣

12 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風のおとにぞ驚ろかり（れ）ぬる（公・俊）／（四丁表）

〔現代語訳〕 秋が来たと見た目（視覚）でははっきりわからないが、涼しい風の音（聴覚・触覚）にああもう秋だなと気付かされることだ。

凡河内躬恒

13 いづくとも春のひかりは分なくにまだみよしのゝ山は雪降（俊）

〔現代語訳〕 どこいつて春の光は分け隔てしないのに、まだ吉野の山には雪が降っていることよ（同じように私は帝の恩恵を蒙ることなく（官位の昇進もなく）不遇の身で沈んでいることよ）。

柿本人麿

14 ほのくくと明石の浦の朝霧にしまぐれ行ふねをしぞおもふ（公）／（四丁裏）

〔現代語訳〕 ほのぼのと明けていく明石の浦の朝霧の中、鳥影に姿を消していく舟を見ていると、しみじみとした気分になる。

中納言家持

15 春の野にあさる雉子の妻こひにおのが有かを人にしれつゝ（公）

〔現代語訳〕 春の野で餌をあさっている雉は、妻恋しさに鳴くので、自分の居場所を人に知られていることだ。

〔出典〕 拾遺集二一番「題知らず」・万葉集一四四六番

素性法師

16 みわたせば柳桜をこきまぜてみやこぞ春のにしき成ける（公）／（五丁表）

〔現代語訳〕 見渡してみると、柳の緑と桜の花が混ざり合って、都は春の錦のよう  
に美しいことよ。

〔出典〕 古今集五六番「花盛りに京を見遣りてよめる」

在原業平朝臣

17 世の中に絶て桜のなかりせば春の心はのどけか（ら）まし （公）

〔現代語訳〕 この世の中にもし桜がまっただけなかつたら、春の心はどんな  
にのんびりしたものだろうか（でも現実にはのどかにはられない）。

猿丸大夫

18 おく山に紅葉踏分なく鹿の声きく時ぞ秋はかなしき （公・俊）／（五丁裏）

〔現代語訳〕 奥深い山に紅葉を踏み分けやって来て、鹿の鳴き声を耳にすると、  
秋の悲しさが身に染みて感じられます。

〔出典〕 古今集二一五番「是貞親王家歌合の歌」

中務

19 秋風のふくにつけてもとはぬかなおぎの葉ならば音はしてまし （俊）

〔現代語訳〕 あなたは私に飽きたから、私を訪れてはくれないですね。萩の葉  
だったら秋風に吹かれて音がした（訪れた）でしょうに。

壬生忠見

20 恋すてふ我名はまだき立にけり人しれずこそおもひ初しに（か） （俊）／（六  
丁表）

〔現代語訳〕 恋をしているという私の噂はやくも広まってしまったことだ。誰  
にも知られないように秘かに思い初めたばかりなのに。

藤原仲文

21 晨明<sup>あけ</sup>のつきの光をまつほどにわが世のいたく更にけるかな （公・俊）

〔現代語訳〕 月の出の遅い有明の月を待っているうちに、すっかり夜も更けてし  
まったなあ。同時に東宮が即位されてその恩恵を蒙るのを待ってい  
るうちに、私もすっかり老けてしまったなあ。

藤原元真

22 夏草はしげりにけりな玉鉾の道行人も結ぶばかりに （ナシ）／（六丁裏）

〔現代語訳〕 夏草はすっかり生い茂ったことだ。道を行く人が旅の安全を祈願し  
て結ぶことができるほどに。

〔出典〕 新古今集一八八番「題知らず」

清原元輔

23 音なしの河こそ終にながれ出（け）るいわで物おもふ袖（人）のなみだは （公）

〔現代語訳〕 音なしの川となつて遂に流れ出てしまった。口に出さずに物思いを  
している私の涙は。

〔出典〕 拾遺抄三一四番・拾遺集七五〇番「しのびてけさうし侍ける女のもとに  
つかはしける 元輔」

源順

24 水の面に照月次<sup>つきなみ</sup>をかぞふれば今宵ぞ秋の最中成ける （公・俊）／（七丁表）

〔現代語訳〕 月光に照らされている水面の浪の数（月次）を数えてみると、今夜  
は中秋の名月（八月十五夜）であったなあ。

信明朝臣

25 あたら夜<sup>よ</sup>の月と花とをおなじくは心もしれん人に見せばや （公・俊）

〔現代語訳〕 見逃すには惜しい今夜の月と花とを、どうせなら物の興趣を知って  
いる人に見せたいものだ（あなたと一緒に見たい）。

〔出典〕 後撰集一〇三番「月のおもしろかりける夜、花を見て」

大中臣頼基朝臣

26 ひとふしに千世をこめたる杖なればつくともつきじ君がよはひは （公・俊）／  
（七丁裏）

〔現代語訳〕 一節ごとに千代の寿命をこめた杖なので、どれだけ杖をついてもあ  
なたの寿命は尽きることはあるまい。

源重之

27 風をいたみ岩うつなみのおのれのみくだけで物をおもふころかな （公・俊）

〔現代語訳〕 風が激しいので、岩にあたる波が砕け散るように、あなたは平気か  
もしれませんが、私はひどく物思いに心を砕いています。

〔出典〕詞花集二二一番「冷泉院春宮と申しける時、百首歌奉りけるによめる」・百人一首

壬生忠峯

28 有明の難面<sup>つれづれ</sup>みえし別よりあかつきばかりうき物はなし （俊）／（八丁表）

〔現代語訳〕 後朝の別れの空にかかる有明の月を見てからというものの、暁ほどつらく悲しいものはありません。

藤原高光

29 かく斗経<sup>ばかり</sup>がたくみゆる世間<sup>よのなか</sup>にうらやましくもすめる月かな （公・俊）

〔現代語訳〕 このように過ぎにくい（住みにくい）と思える世の中なのに、月は羨ましいほどに清らかに澄んで（住んで）いることよ。

中納言朝忠

30 逢事の絶てしなくは中々に人をも身をもうらみざらまし （公・俊）／（八丁裏）

〔現代語訳〕 いっそ逢うことが二度と無いのなら、かえってあなたのつらさも我が身のはかなさも、恨まないで済んだだろうに。

小野小町

31 色みえでうつろふ物<sup>よのなか</sup>は世中の人のこゝろの華にぞ有ける （公・俊）

〔現代語訳〕 顔色にも表れないでいつの間にか変わるのは、この世の中の人（移り気な男）の心なのですね。

紀友則

32 秋風に初かりがねぞ聞ゆなるたが玉章をかけて来つらん （公）／（九丁表）

〔現代語訳〕 秋風に乘って初雁の声が聞こえてくるようだ。一体誰の手紙を運んできたのだろうか。

〔出典〕古今集二〇七番「是貞親王家歌合の歌」

僧上遍昭

33 たらちねはかゝれともしもうば玉の我くる髪をなでずや有けむ （公）

〔現代語訳〕 母親はまさか私が出家すると思って、幼い私の黒髪を撫でたのではなかっただろうに。

〔出典〕後撰集一二四一番「初めて頭おろし侍ける時、物に書きつけ侍ける」

山邊赤人

34 和歌能浦介塩満来礼婆片男浪芦辺平佐芝天津啼渡流 （公・俊）／（九丁裏）

〔和歌の浦に潮満ちくれば潟をなみ芦辺をさして田鶴鳴き渡る〕

〔現代語訳〕 和歌の浦に潮が満ちてくると干潟がなくなるので、葦の茂っている辺りをめざして鶴が鳴きながら飛んでいくことよ。

伊勢

35 三輪の山いかに待見ん年経とも尋る人もあらじとおもへば （公・俊）

〔現代語訳〕 私は三輪の山であなたをお待ちすることはいたしません。たとえ何年経ってもあなたが私を訪ねてくれるはずもないので。

紀貫之

36 桜ちる木の下風は寒からで空にしられぬ雪ぞ降ける （公）（十丁表）

〔現代語訳〕 桜が散る木の下を吹く風は寒くはないが、天のあざかり知らぬ雪（桜のはなびら）が降っていることよ。

紫式部

別1 めぐりあひてみしやそれ共わかぬまに雲がくれにし夜半の月景<sup>かげ</sup> （百人一首）

〔現代語訳〕 久しぶりにお逢いして、今見たのはその人かどうかも見分けがつかない間に、雲隠れした夜半の月のように、あなたは帰ってしまったことです。

〔出典〕新古今集一四九九番「はやくよりわらはともだちに侍りける人の、とし

ごろへてゆきあひたる、ほのかにて七月十日の比、月にきはひてかへり侍りければ」

和泉式部

別2 あらざらんこのよの外の思出に今一度のあふ事も哉 （百人一首）／（十丁裏）

〔現代語訳〕 私はまもなく死んでこの世を去りますが、せめてあの世への思い出にもう一度あなたにお逢いしたいものです。

〔出典〕後拾遺集七六三番「こち例ならず侍りけるころ、人のもとにつかはしける」



## 〔注〕

(1) これまでに吉海「三十六歌仙基礎資料稿」同志社女子大学大学院文学研究科紀要19・平成31年3月、同「三十六歌仙基礎資料稿(2)」―「佐竹本三十六歌仙」を読む―同志社女子大学日本語日本文学32・令和2年6月の二本がある。

## 【解説】バラエティーに富んだ「三十六歌仙」

## 一、三十六歌仙概説

本書は歌仙絵がなく、和歌だけが羅列されている「三十六歌仙」の写本である。伝本として歌仙絵のある方が目立っているが、歌仙絵のない写本類も少なからず存している(書道手本も多い)。百人一首同様、歌仙帖・かるたや絵馬、単独の絵入版本が存するのみならず、百人一首よりさらに小品であることで、百人一首版本の頭書に掲載されることも多い。肉筆歌仙帖などは、百人一首をはるかに凌ぐ伝本が存している。版種も百人一首と同じくらい、いや百人一首より多いかもしれない(調査はされていない)。

世上に多く出回っているということは、それだけ流布していることの証拠であるが、逆にあまりにも一般化しているために、「三十六歌仙」は長い間研究の対象とはならなかった。特に百人一首と違って、「三十六歌仙」は歌道の入門書(教科書)としてはほとんど機能していなかったのだ、注釈書類は百人一首に比べて極端に少ない。そのことは現代でも同様であり、百人一首解説本が数え切れないほど出回っているのに対して、書店で「三十六歌仙」の手ごろな解説本(文庫本)を見つけることは困難である。

その理由は不明だが、あるいは藤原定家が関与しているか否かの差なのかもしれない。藤原公任は偉大な文化人であり、彼が編纂した『和漢朗詠集』は江戸時代まで重宝されていたのだが、明治以降になると「三十六歌仙」ともども文学史から消えていった。江戸時代までの「三十六歌仙」の受容の多さを思うと、何故文学史に掲載されなかったのか不思議なくらいである。同じく秀歌撰ということで、百人一首の陰に隠れてしまったのかもしれない。藤原公任の評価が低かったからであろうか。あるいは高校古文の教科書に採用されにくかったからだろうか。

## 二、本書の書誌

「三十六歌仙」の伝本は豊富に現存している。百人一首に江戸時代以前の歌仙絵は報告されていないが、「三十六歌仙」ならばそれこそ鎌倉時代・室町時代の伝本が残っている。江戸時代にしても、百人一首以上に存しているが、何しろ研究が遅れているので、総合的な調査も未だ行われていない。それは「三十六歌仙かるた」も同様で、かなりの数があるはずだが、調査されることがなく放置されたままである。それが三十六歌仙研究のお粗末な現状なのである。

ここで本書の書誌について記しておきたい。全体に傷みがあり、虫損も存する。表紙はなく、題簽もないので、書名は未詳。ただし後に補われたと思われる袋及びカバーに、「古名筆三十六歌仙帖／筆者不詳／推定年代室町末以降」と記されている。丁数は全十一丁。最初の一丁は遊紙。二丁目の裏から一面六行書きで、一面に作者と歌が二首ずつ両面書きされている。全三十六首揃い。十一丁目の裏には、別筆で紫式部の「めぐりあひて」歌と和泉式部の「あらざらん」歌が書き加えられている。二首は百人一首所収歌であるが、書き加えられた理由はわからない。なお二丁表の右下に「くさぐさのや」という蔵書印が押されている。

寸法はタテ21.5センチ×ヨコ16.5センチ。現状は仮綴になっているが、もとは列帖装だったものを切断して仮綴にしているようである。というのも、痛んで色褪せてはいるが、色替り料紙が使われているからである。仮に列帖装だったとすると、六葉程の料紙が半分に折られていたことになる。それをタテに裁断して仮綴にした際、乱丁が生じたのではないだろうか。それによって歌人の配列(順序)が大きく乱れてしまったわけである。その際に付けられたと思われる紺色の裏表紙(改装)は残っている。

奥書もないので、書写年代などは未詳であるが、筆跡を見ると近世初前期頃かと思われる。松花堂昭乗風の書体に見えなくもない。

掲載されている和歌には、いささか本文異同が認められるが、中でも元輔歌、音なしの河こそ終にながれ出るいわで物おもふ袖のなみだには、  
には異同が多い。たとえば『拾遺集』には、

音無の川とぞつみに流れけるいはで物思ふ人の涙は  
と出ており、三・五句目に異同がある。また『三十六人撰』など、  
音なしの滝とぞ遂になりける言はで物思ふ人の涙は  
とあって、二・三・五句に異同があった。

## 三、奇妙な配列と撰歌

歌の配列を調べてみると、最初に藤原興風から書かれており、最後は紀貫之になっている。これは列帖装を切断した際に生じたものかもしれない。だからといって無秩序に書かれているともいえない。というのも前半の十八首は、配列こそ乱れてはいるものの、すべて上段（左）の歌人だからである。当然、後半の十八首はすべて下段（右）の歌人である。それどころか後半は、貫之・伊勢・赤人・遍昭以下、忠見・中務まで、ほぼ逆の順に配置されている（前後反転？）。

もっとも冒頭に位置するはずの人丸歌は、十三番目の躬恒の歌に続いて十四番目に書かれているので、冒頭にあった可能性は認められない。要するに本書の親本（切断される前の本）からして、人丸から書かれていたわけではなさそうである。

次に本書に採られている歌が『三十六人撰』なのか『俊成三十六人歌合』なのかを調べてみたところ、両書に採られている歌が十九首で、『三十六人撰』にのみ採られている歌が十二首、『俊成三十六人歌合』にのみ採られている歌は四首と少なかった。なお両書どちらにも出ていない歌が一首だけあった。それは藤原元真の、

・夏草はしげりにけりな玉鉾の道行人も結ぶばかりに（新古今集一八八番）である。

そこで『日本歌学大系別巻六』所収の諸本と校合してみたところ、近衛尚通が『俊成三十六人歌合』に自ら各一首を追加した「一古三十六人歌合〔戊〕」の中に、この歌が細字で追加されていた。また「二古三十六人歌合〔己〕」にも出ていた。それとは別に、茨城県にある菅谷鹿島神社所蔵の「三十六歌仙絵馬」や高志の国文学館所蔵の『三十六人歌合』でも元真歌は「夏草の」であった。これによれば本書は、決して孤立例ではないことになる。

それどころか「一〇古三十六人歌合〔丁〕」（志賀須賀文庫）を調べてみたところ、本書と所収和歌が完全に一致していることがわかった（1）。おそらく本来の配列も、これに準ずるものだったのであろう。

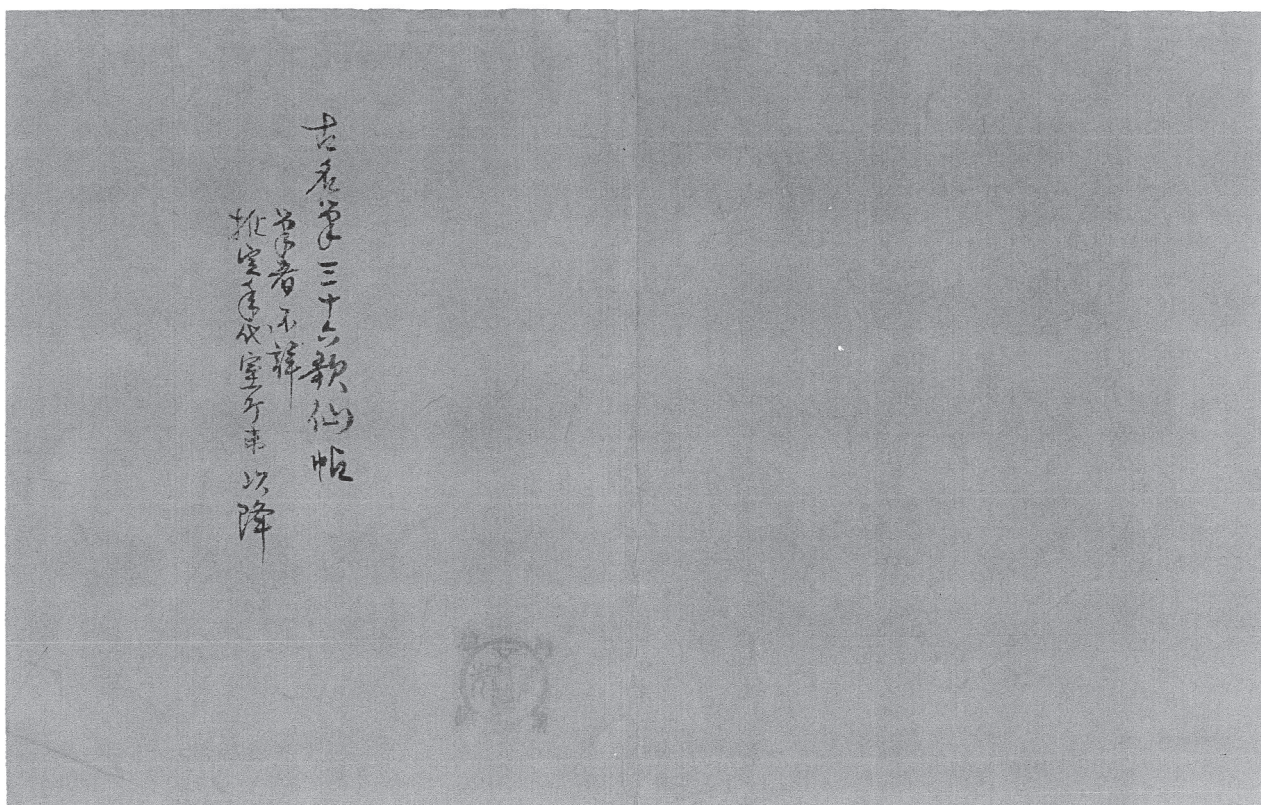
## まとめ

もともと「三十六歌仙」の伝本のほとんどは、こういった混態本なので、本書だけが特に珍しい配列をしているわけではない。もっと多くの諸本を調べていくと、本書と一致する本が他に見つかるかもしれない。今はまだ基礎研究の段階なので、当分は資料の発掘・紹介を行って基礎資料を充実させていきたい。

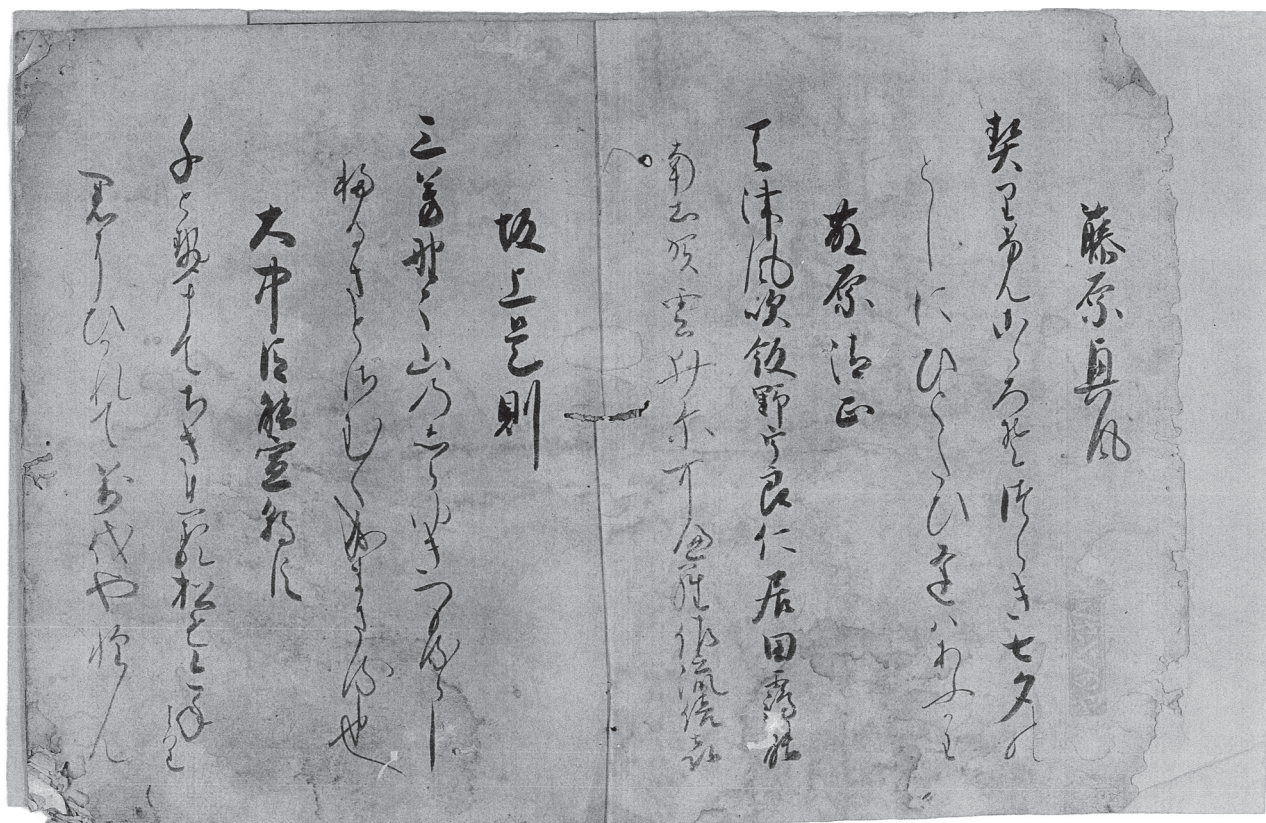
## 〔注〕

（1）「一〇古三十六人歌合〔丁〕」の一番歌は「ほのぼのと」であり、三十六番歌は「秋風の」であった。なお本書の所収和歌は『歌仙拾穂抄』と一致している。それをさらに遡ると、近衛前久（龍山）・松花堂昭乗にたどりつく。要するにこの諸本系統は近衛家を親本としていることになる。ただし龍山や昭乗のところには複数の諸本が存していたようなので、単純な分類はできそうもない。新藤協三氏『三十六歌仙論叢』（新典社）参照。



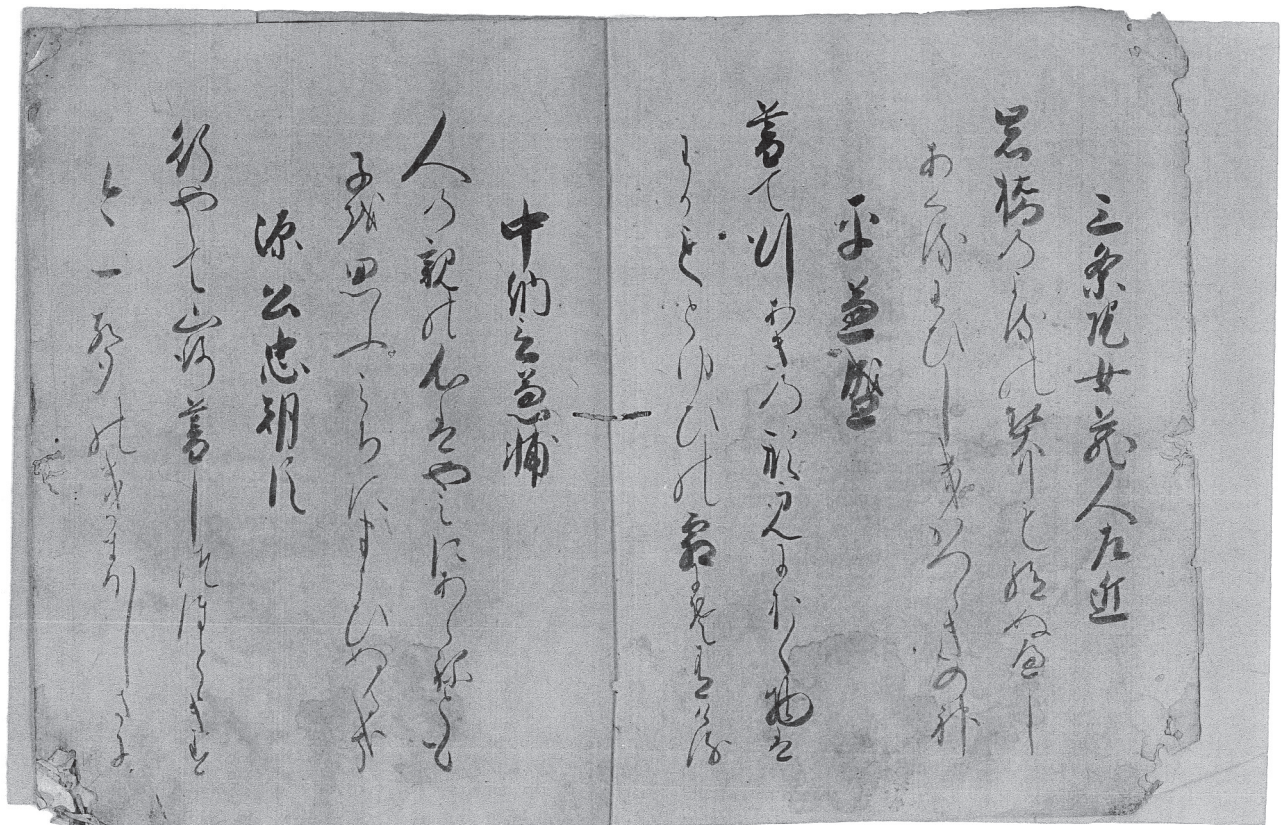


【図版1】カバー・書題簽

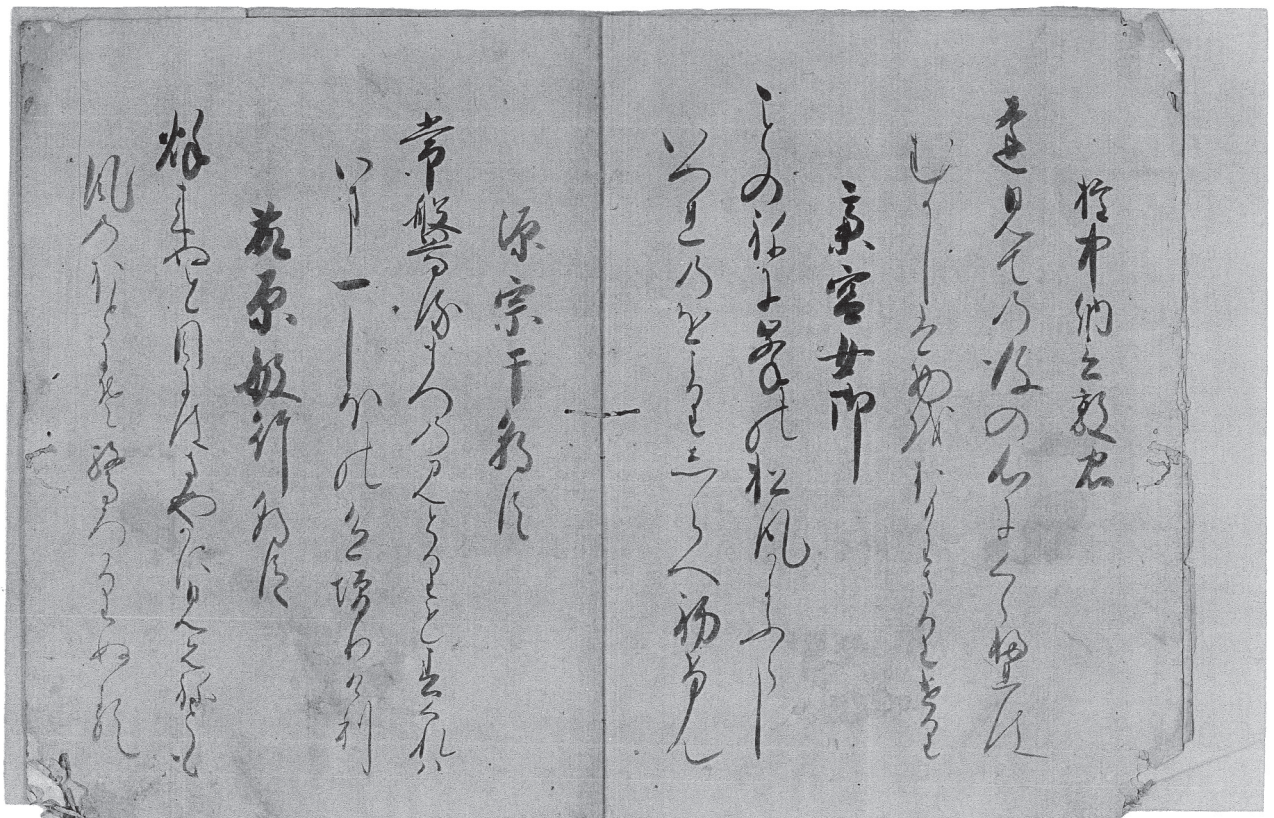


【図版2】第一面（二丁ウ・三丁オ）



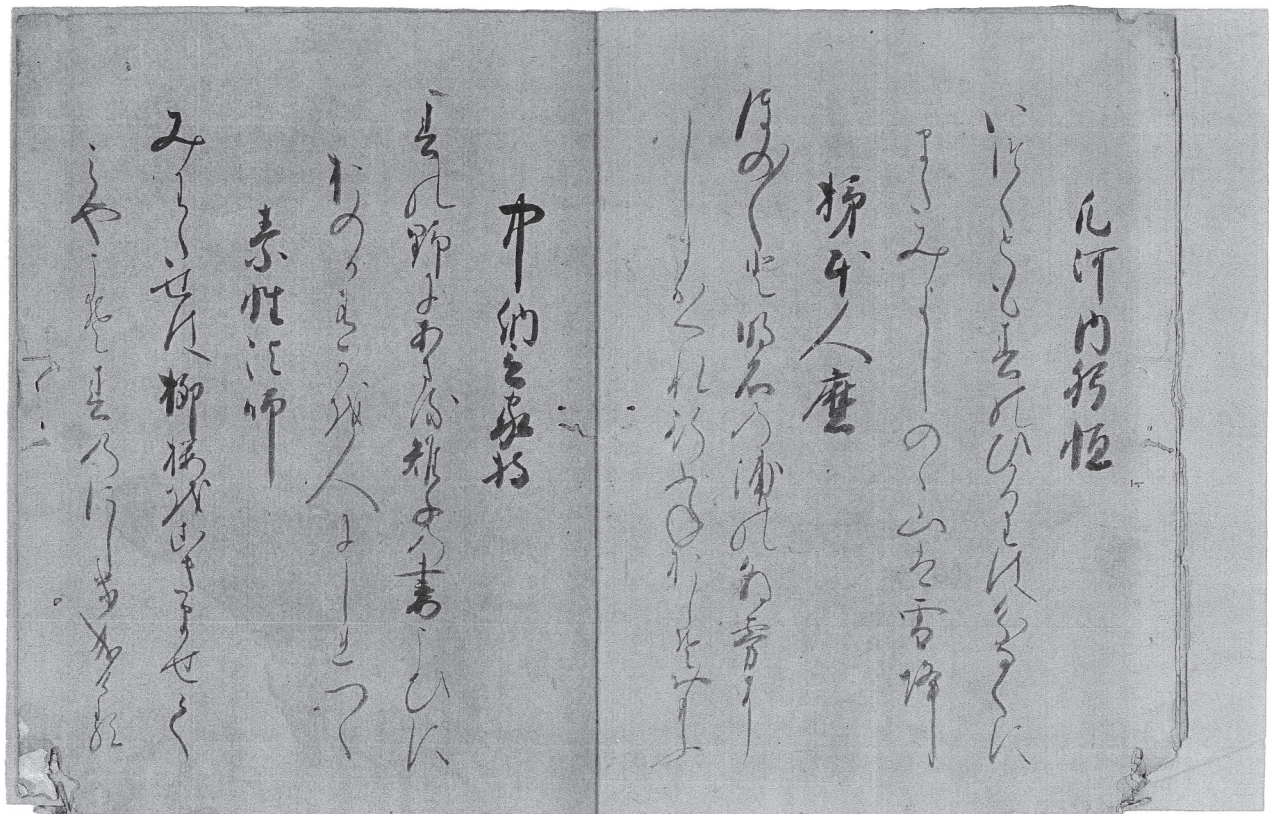


【図版3】第二面（三丁ウ・四丁オ）

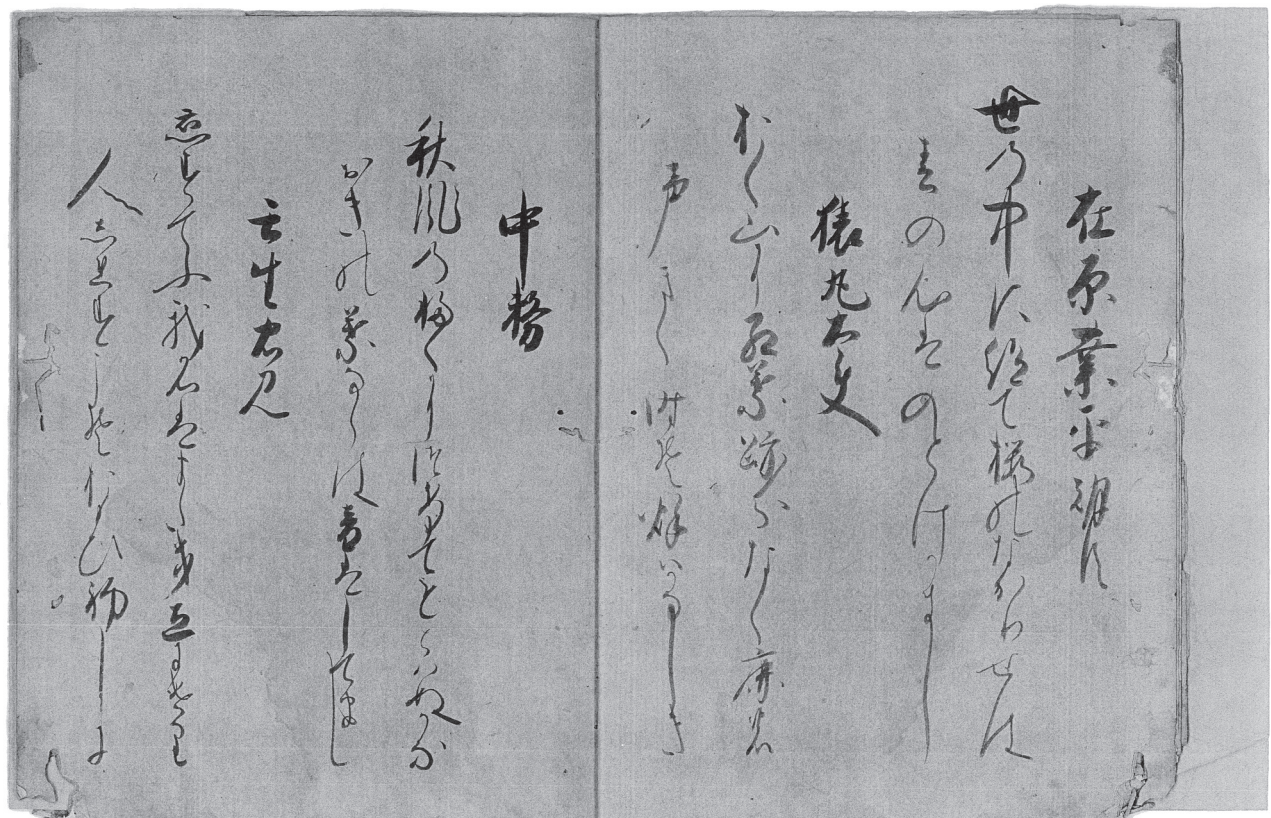


【図版4】第三面（四丁ウ・五丁オ）



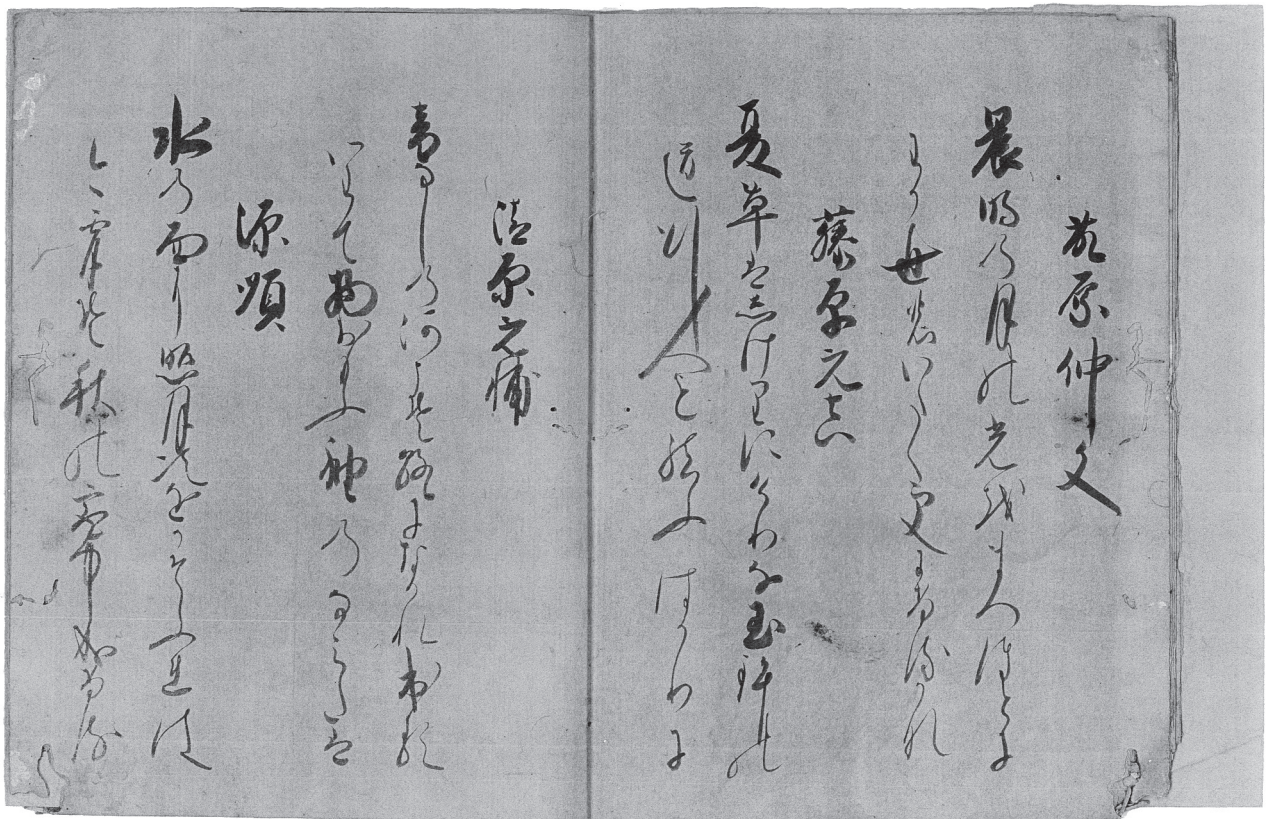


【図版5】第四面（五丁ウ・六丁オ）

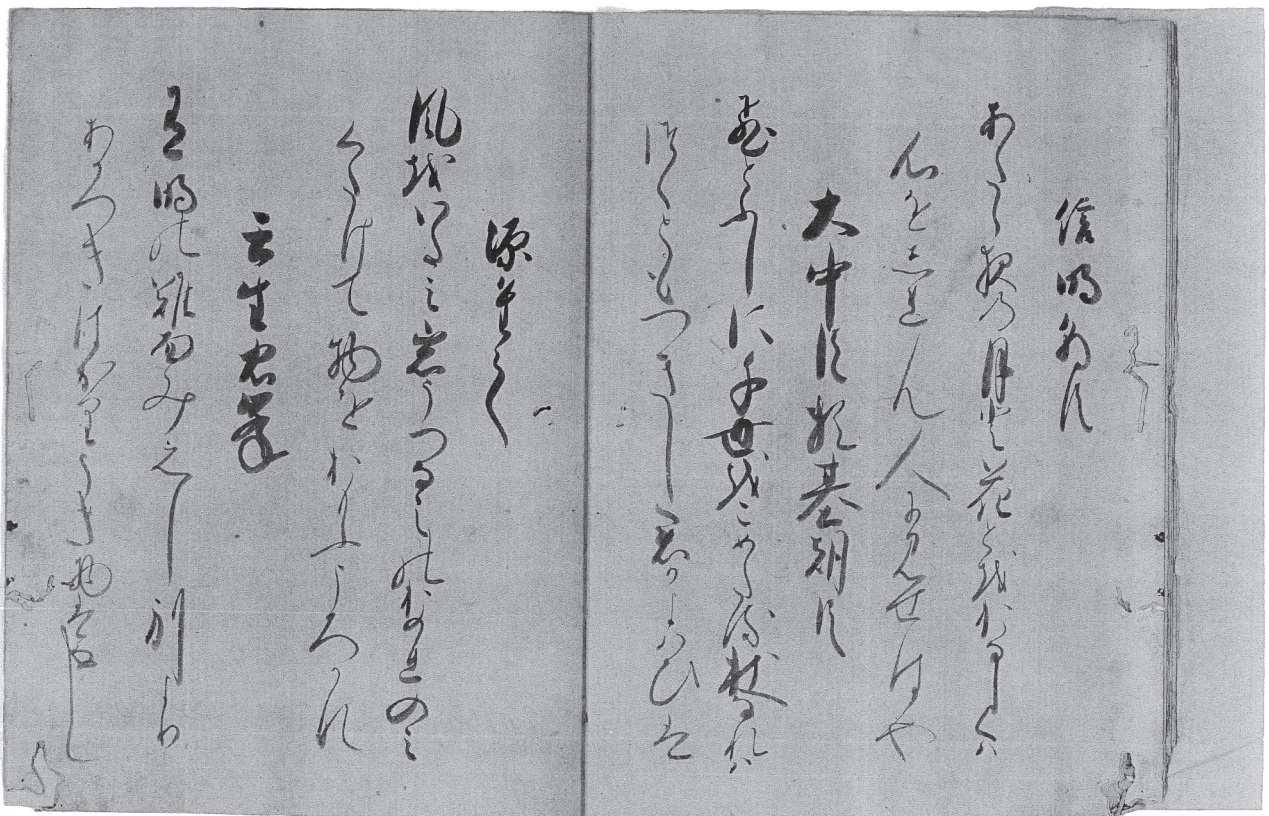


【図版6】第五面（六丁ウ・七丁オ）



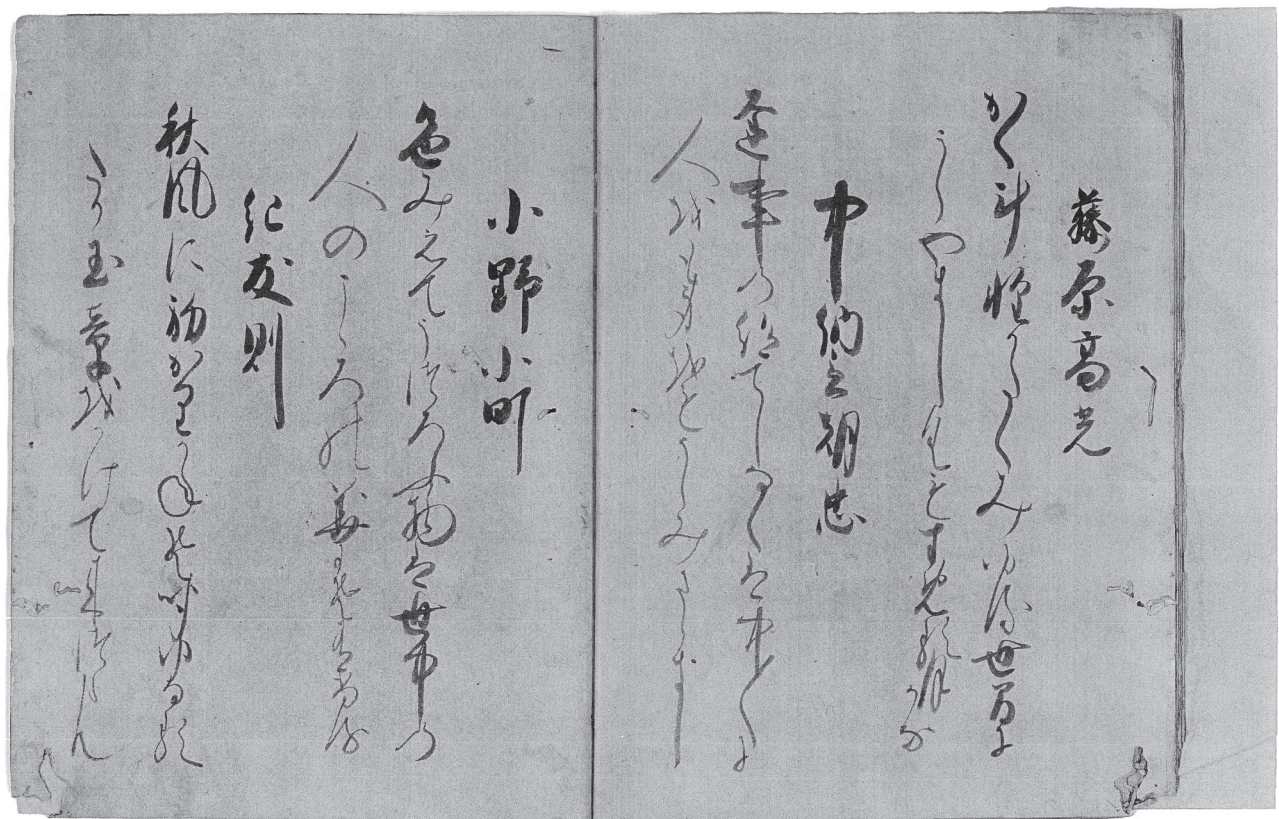


【図版7】第六面（七丁ウ・八丁オ）

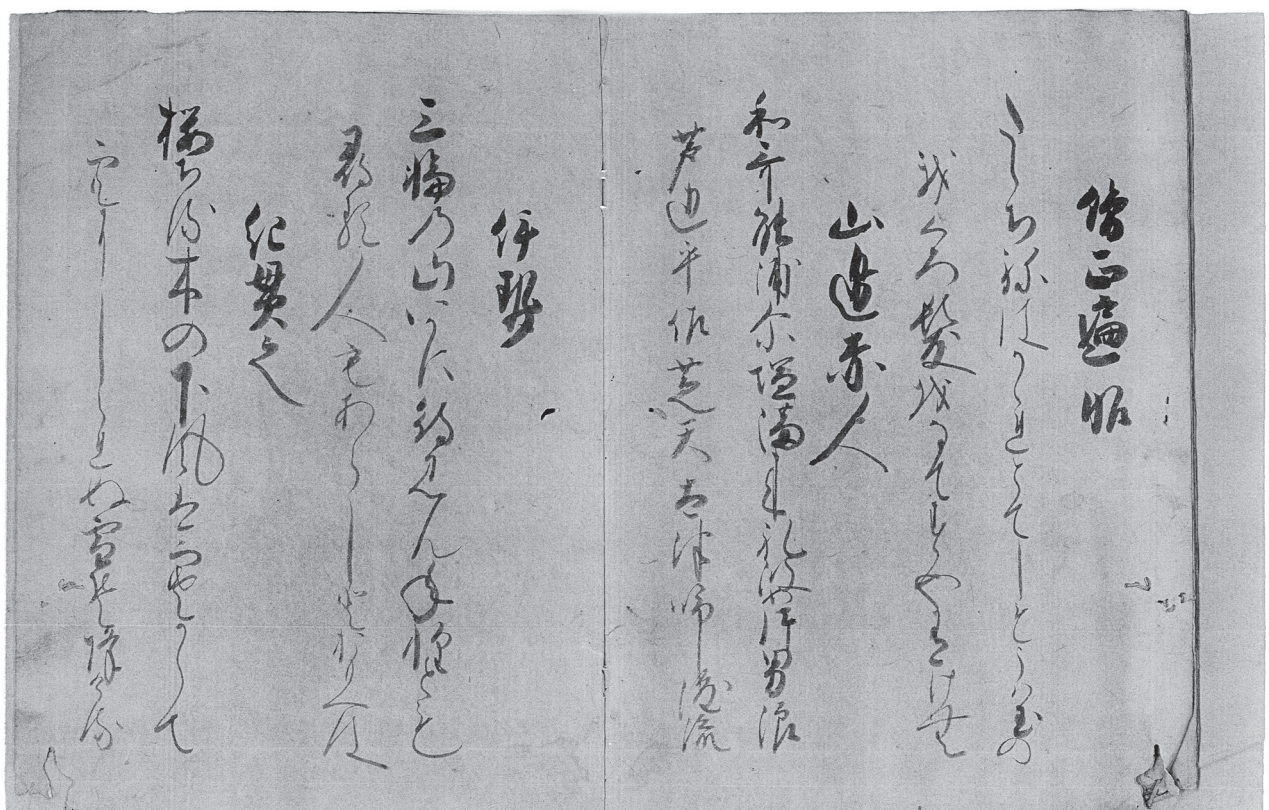


【図版8】第七面（八丁ウ・九丁オ）



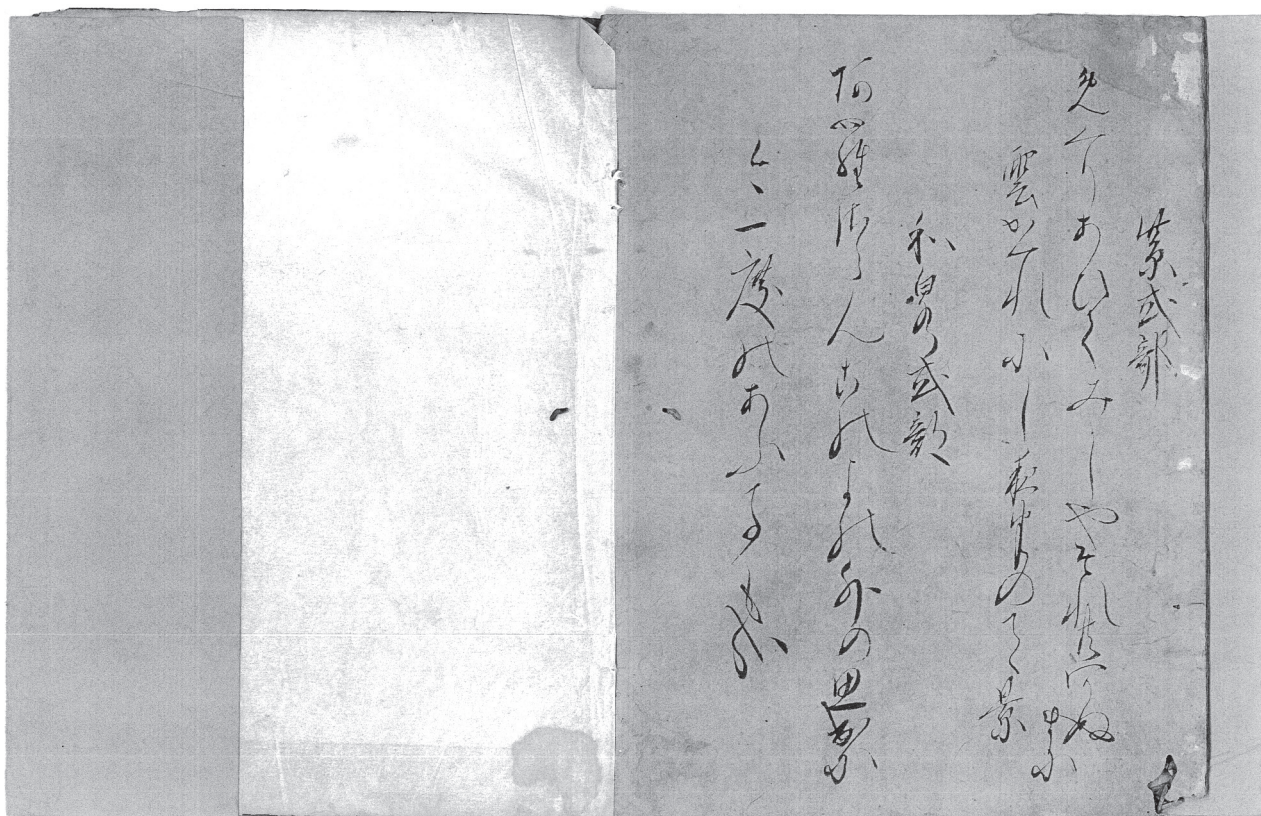


【図版9】第八面（九丁ウ・十丁オ）



【図版10】第九面（十丁ウ・十一丁オ）





【図版11】第十面（十一丁ウ）



【図版12】裏表紙見返し